

研究ノート

## 恋愛2007

### —社会福祉演習Ⅰにおける教育実践—

小山 聡子

2007年度3年小山ゼミ一同<sup>\*1</sup>

### Love 2007—Educational Practice in “Seminar of Social Welfare”—

Satoko Oyama

Third grade students of Oyama's Seminar

2007年度小山が担当した社会福祉演習Ⅰの成果をメンバーの取り組んだフリートークの会話分析と、その後のディスカッション、及びそれら全体を踏まえた最終レポートの内容をまとめることによって表現した。ディスカッションを通じて、①各学生自身、②学生グループ間、③学生と教員間それぞれの相互作用から見えた「今、そこ」の恋愛にまつわる「当たり前」を描くことによって、「排斥するかもしれない人」に対する想像力を高め、代替案を考えることに結びつく対話の力を高めることができたと考えられる。また、自己理解を更新し、一期一会の集まりとしての3年ゼミのつながりを深めることができた。

キーワード 社会福祉演習Ⅰ・社会構成主義・語り・恋愛・当たり前

#### はじめに

小山聡子が担当する2007年度の社会福祉演習Ⅰ（いわゆる3年ゼミ）は、対人援助の理論と技法について学びつつ、それそのものを現代思想の流れに位置づけ、批判的に検討するところまで視野を広げることを目指し、12名の参加者とともに勉強を積み重ねてきた。学んだ理論や方法を実際の援助や生活の場面に適用して説明、実践ができる「真の理解」を念頭においた取り組みを重視したことも特徴である。小論は、本演習授業が目指した内容がどれくらい達成できたのかということ

を、教員を含む各メンバーの「語り」<sup>1)</sup>を通して検討することが目的である。こうした試みそのものが、上記目的の最終仕上げの意味を持ついわゆるパフォーマティブな記述である<sup>2)</sup>。また、この取り組みは後期に取り上げたガーゲンの社会構成主義に関する著書による次の記述<sup>3)</sup>を契機としている。

—心の中の知識や理性という想定が疑わしいとすれば、現在の教育システムの背後にある理論的な根拠にも、疑いの目が向けられることになり

<sup>\*1</sup> 安晝真妃・池田佳奈子・紺野桂子・齋藤彩加・齋藤加奈子・齊藤倫子・清水翔子・高原茉里・津田美由季・村岡美奈子・吉本祥子・渡部英里

ます。従来、学校は生徒一人一人の心の質を高めること―心の中の知識を増やし、考える力をつけること―に専念してきました。教科の内容を身につけ、レポートを書き、試験を受け、その結果によってほめられたり叱られたりするの  
は、あくまでも生徒個人です。生徒達が集団として評価されることはほとんどありません。生徒の家族がどのくらい貢献したか（あるいはしなかったか）が問われることもありません。教師と生徒の関係（例えば「お互いに切磋琢磨しているか」）がテストされることもありません。（下線は筆者）

上述した「学んだ理論や方法を実際の援助や生活の場面に適用して説明、実践が出来る真の理解」を、学生同士が互いの関係を意識した「語りの場」そのものと、それを外から見ている教員との「関係」、そして最終的には教員と学生を含む「今、そこ」<sup>4)</sup>にあった学問グループの実際として描き出すことで追求し、同時にガーゲンの問いかけに多少なりとも答えることが出来るのではないかと考えた。

## 1. 方法

本授業では、前期にカウンセリング理論の勉強を通じた自己理解と自己主張、及びふれあいと他者受容の実践を試みている。さらに後期にはこうした対個人支援の基礎をなす理論と実践が、暗に「後退の語り」<sup>5)</sup>を要求することによってある種の権力構造に相手を巻き込んでゆく危険性に着眼する社会構成主義の観点から「関係」をキーワードに代替案に結びつく語りの更新を行うことを試みてきた。

まずは、これらの概要を振り返り、特に前期のレポート課題に各メンバーがどのように取り組んだかということを背景状況として記述する。それ

らを踏まえて後期の取り組み内容の概要を記す。そして本題は、年末最後の授業にて行ったフリートーク「恋愛2007」の内容記述である。これに対して社会構成主義の考え方を踏まえて検討を加える。（その手順は後述）

## 2. 1年間の授業内容

### (1) 前期の授業内容と課題レポートに見る自己理解

前期は、①カウンセリング理論と技法の勉強を通じて自己の傾向に気づき、他者支援の準備をする、②エンカウンターエクササイズを通してふれあいと自己発見を促進する、③社会福祉援助の方法とカウンセリングの関係について考察する、④説得力のある話し方、発表の組み立てなど、プレゼンテーションのノウハウを学ぶ、の4点をねらいとして掲げた。カウンセリング理論については精神分析理論、自己理論、行動主義理論、ヒューマニスティックアプローチ、認知的アプローチ、交流分析の6つを取り上げた<sup>6)</sup>。それぞれ2人1組で行った発表は内容の報告及び、各理論の理解を深めるためのエクササイズからなる。これらの理論を、ミクロレベルの社会福祉援助活動を支える豊富な道具を取り揃える分野としてとらえ、また、人間観・性格論・病理論・治療目標・カウンセラークライアント関係と役割といった柱立てで比較することも行った。後半に行った構成的エンカウンター<sup>7)</sup>においては、それら諸理論の折衷的な立場から、自己疎外からの脱却をめざすホンネとホンネの感情交流促進、および自己理解の促進を同時並行で行うことを念頭に4人1組で①自己主張、②自己理解、③自己開示の順にエクササイズを提示、主導すること、及びそこに理論的な説明を付加することを要請した。実際のエクササイズは、金魚ばち、お願いのロールプレイ、自分と似ている人・対照的な人を探す、失敗

談を語る、モザイク構成式エクササイズなどである<sup>8)</sup>。

これらの取り組みを経て出した前期のレポート課題は、「前期に取り上げたカウンセリングの諸理論及び取り組んだ各種のエクササイズをとおして進めた自己理解と他者受容について論じなさい」というものであった。複数の理論を取り上げることと、「自己理解」は必ずしも書き手本人の自己理解でなくともかまわないという条件を付与した。結果12名中11名が自身の過去ないし現在を取り上げて、性格の自己認識と今後の展開、きょうだいや親との関係の振り返りと語りなおしや、困難な経験を通して考える他者との関係をつづり、理論の利用によって「悩むべきことを悩む」人に変化する様子が汲み取れた。1名は課題映画として鑑賞したグッドウィルハンティングを通しての自己理解を論じた。

## (2) 後期授業の内容

後期にあげたねらいは次のとおりである。①カウンセリングを含む個別援助技術とその理論を次にあげるキーワードとの関係で俯瞰することを試みる。(キーワードはケースワーク・ソーシャルワーク・援助関係・社会福祉・感情社会学・社会構成主義)②論文の書き方に結びつく、論理的思考のトレーニングを行う。③4年次に取り組む卒業研究のテーマを決め、枠組みを作る。流れとしてはまず、論理的考察と文章作成のエクササイズ<sup>9)</sup>を②のねらいの元に行い、後半部分でガーゲンの『あなたへの社会構成主義』を利用して、2人一組による文献内容の読み込み、及びその考え方を適用した事例の説明やディスカッションを行った。取り上げたのは、主に理論内容が詳述された最初の6章で、そのタイトルは次のとおりである。

第1章 伝統的人間観の行き詰まり

第2章 共同体による構成－事実と価値

第3章 対話の力－明日を創る試み

第4章 社会構成主義の地平

第5章 「個人主義的な自己」から「関係性の中の自己」へ

第6章 理論と実践 (1)－対話の持つ可能性

概して内容の読み込み自体が学生にとって難易度の高いものであった。取り組み方としては、2人一組のチームで最初の読みこみとレジュメの下案を作成した上で質問事項を持って大体のメンバーが1週間前に小山(教員)を訪れ、内容の確認と読み取った内容を適用する具体的な事例の選定について相談を進めた。結果、必ずしも毎回全員がクリアな理解を進めたとは言い切れないが、適用する事例やシーンの取り上げ方及び適用の仕方は徐々に的を射たものになっていった。

## 3. 恋愛2007 (フリートークの分析)

### (1) 方法

上記6章までの輪読が終わった段階でまとめの作業に入るに当たって、当初小山(教員)が提示したテーマは、自分達の語りにある「普通～だよね、～って当たり前だよね。」を社会構成主義の考え方にそって見つめなおし、それを俯瞰する試みである。しかし、まとめ1回目のディスカッションを経て、「当たり前」を俯瞰するにはその「当たり前」が何たるかを描き出す作業がまずなければならないとの気づきに至り、ごく身近なテーマの中に「当たり前」を探る作業を検討した。そのようにして提起されたのが「恋愛」であり、当たりの描き出しは①学生個人の気づき、②学生相互の関係を通した気づき、③学生グループを外から見た教員の気づき、④教員のフィードバックを経て学生と教員全体の相互作用からみえた気づきといういくつかの関係の往復を経たものにすることを提起した。(図1参照) 具体的な手順は次

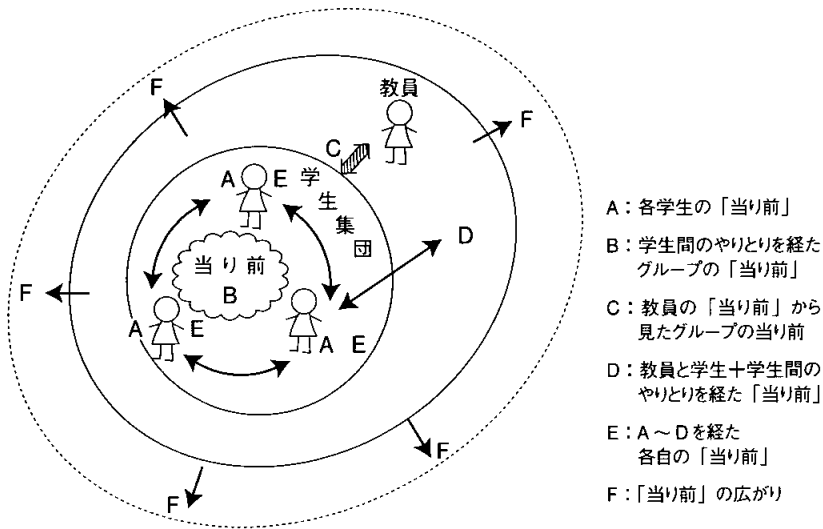


図1

のとおりである。

まず、以下のような説明とともに2007年の年末の最終授業日（12月19日）に90分間恋愛にまつわるフリートークを行いテープ録音をした。教員はメモを取りながら場の雰囲気を後ろから観察した。学生に配った呼びかけ文は以下の通りである。

—今好きな人がいるいない、誰かと個別に付き合っているか否かにかかわらず「恋愛」は私達にとって常に重要なテーマであり続けてきたと思います。恋愛におけるこだわりをテーマに自由に語り合しましょう。好きなタイプは？自分が人を好きになるパターンってあるのか？（やば、グッときた、みたいな）付き合う中で悩むことって何？20代前半の今の自分にとって恋愛とは何か？結婚を意識することはあるのか？結婚するとしたらどんな成り行きで？その他もろもろ・・・これらのことを今までに学んできた様々な観点と手法、みずからの傾向の自己覚知を踏まえ、グループとしての見解がもっとも沢山引き出される工夫をしてください。

次に、年度最後の授業日（2008年1月9日）にフリートークを振り返ったゼミメンバーのディスカッションを願った。観点は恋愛における各自の立ち位置<sup>10)</sup> 確認と、排斥する可能性のある立場の想定、グループのダイナミズムに関する気づき及び自分自身を語りなおす可能性の検討である。同最終授業において、ディスカッションの最後に教員から自身の立ち位置を明らかにした上でフリートークへのフィードバックを行った。次に、同日のディスカッション内容、テープ起こし原稿による発言内容の再確認、教員のフィードバック、それらすべてを踏まえての学生各人によるまとめの最終レポートを1月23日締め切りで提出願った（2000字）。前述した一連の流れを総合して一期一会の集まりとしてあった2007年度小山ゼミの内容について教員が原稿を作成し、1月31日にメンバー全員に配布し、内容のチェックを依頼し、その後はメールによる修正のやり取りを行った。

テープ起こし後のテキストは、次の手順で会話分析<sup>11)</sup>を行った。メンバー個人個人が持つ多声、及びグループ内における多声に対してどのように

発話の流れが開かれていくかということを全体の流れの中から汲み取る。そのために①特定の見解を切り出すキーワードないしはキーセンテンスをマークし、それに対する同意や驚きといった反応の出方をチェックする。②次にそれとは違う見解の出方と承認のされ方をやはり発話の流れから読み取る。文脈に依存する発話の意味づけを見失わないために、提示する会話（文）は必ず語られた順に表記する。③家族や身近な人に言及する場合があるため、倫理上の配慮からここまでは特に個人名を出さずに流れを追う。また同時に、内容を変えない範囲で最小限、語られた文言について婉曲な表現に変換する場合もある。最後の5分程度で各自がまとめを語った部分についてはグループ内における各メンバーの役割検討にも関連するため記名の上、記すこととする。最終リポートからの引用を始めとして、個人名が出る所に関しては各自が必ずチェックをし、最終的に草稿をメンバー全員が確認する。

## (2) 内容

話の流れはまとめを含む6つのパートに分かれていた。順を追って記載、分析する。

### 1) 好きなタイプ（亭主関白をめぐって）

グループのリーダー役から「じゃあ好きなタイプ言いたいって人？」との語りかけで始まったフリートークは、まず1人のメンバーから「尊敬できる人」そして「亭主関白じゃない人」というたたき台の提示があった。それに対して即座に「亭主関白じゃない」を否定する見解、すなわち「亭主関白がいい」という意見が出され、その後ひとしきりこのキーワードをめぐる話が展開する。「亭主関白がいい人」の問いかけに6名が手を上げ、他のメンバーより「超意外なんだけど。」といった反応がある。

しかしすぐに「え、それって二者択一？」という疑問が呈され単純化への反対が表明される。「私は、何か別に普通の人がいいな。亭主関白なのはちょっと嫌だし、でも亭主関白じゃないすごい弱々しいみたいのはいや。何か両方みたいなの。引っ張ってくれるときもあるし、それは・・・。」そこで、「亭主関白についての皆の意見（定義づけ）が違うと思います。」と定義確認の提案があり、意味するところについてより細かな話し合いが始まる。その内容として「自分の方が上」、「すべて準備されてるみたいなの（帰ったらお風呂の用意も食事の用意も）」といった語りだしから「女は家事と子育てを行い、男は外で働くから家事はやらなくていいとか」という性別役割分担意識の強い男性のイメージがまず出された。次に「しっかりしている」「やさしさのある」「気遣いの出来る」といったイメージが出され、「何か決定する時とかに主導権握って欲しい」というイニシアティブの話に展開する。

そこまで来て、冒頭で「亭主関白じゃない人」という理想像を提示したメンバーに対する「それもいいやなの？」という問いかけがあり、「嫌だ」との回答。そこで「へー、意外。」と言う反応も聞かれたが、同時に同意の見解が出る。「私も嫌だ。決めて欲しくない。何か他の人に決められるとその人のせいにしちゃいそうだし、何か失敗した時に。あと自分で決めてやりたいから。」と言い、続けて「・・・っていうか、何か亭主関白はすごい縛られるイメージが私的にはあるから・・・」と拘束される感じへの嫌悪感が語られる。

しかし一方、次に「亭主関白が、男がしっかりしている、男が上みたいなイメージというよりも、亭主関白じゃないと、頼ってくるみたいなイメージがあって。」という見解が出され、それに対して「あー、なよい男みたいな？」とキーワードとしての「なよ男」が登場する。ここに来て、イ

メージが多様化すると共に、頼ってくる男性の雰囲気に対するネガティブな名づけとしての「なよ男」が提示され、同時に頼られることに対するある程度の許容を示す見解も出てくる。「自分のことは自分で決めて、私も自分のことは自分で決める。」という「自立型」を表明するメンバー、「頼り方」の度合いを程度問題としつつも、少し女性の側が多くて良いとジェスチャーで示すメンバーが出る。

冒頭のメンバーはそうしたネガティブな名づけをも乗り越えて「え、でも亭主関白よりは（なよ男がいい）。」と語り、別のメンバーが「でもなよ男で尊敬できるっていうのは・・・」と皆の爆笑をはさんで「ちょっとそこに矛盾がある。」と返した後、冒頭のメンバーより「なよ男である（と彼女が見ている）」父親に対する尊敬の念が語られる。これに対して「は一、なるほど。」という承認の声。

「頼る」という概念をめぐって物事を決め推進してゆくときの主導権といったイメージから「あたしもけっこう自分で決めたいから何かアドバイスを聞くくらいならいいけど、それで男の方が決定するのは嫌で、むしろ私が決めて引っ張ってく。」という見解が表明され、それに対しては「似てる。」「意外だね。」「引っ張っていくほど元気ないな。」等多様な見解がばらばらと出されている。そしてこのセクションは、「別に私は相手が決めていいの。場合によっては。こうすればってアドバイスをしてくれて、それに対して、じゃあそうしようかなみたいになりたい。全部自分が決めるっていうのも、自分は優柔不断だから嫌で。相手もそこそこ支えてくれて、相手が迷っている時は私が支えて、とかが好き。」というまとめめいた語りで次のテーマに移ってゆくことになる。

## 2) 家庭環境の影響

「ちょっと話変えていいですか？あの、何か亭主関白がいいよとか良くないとか言うのは自分の家庭環境が影響しているなって思ったんですけど。」と家庭環境の話に移行する。ここで、「亭主関白」の対概念としての「かかあ天下」が紹介され、またそれに対して自分の家庭が「真逆」であるという表明があり、場はそれぞれの出身家族の紹介へと流れてゆく。ある父親が、家族メンバーの作った食事を「平気でまずいとか言うし」に対しては「えー！！」という反応がある。

「うちは、お父さんが全部スケジュール組んで、実家に帰るときだったらお父さんがこの日に帰るからこのときは皆一緒に行って、皆で帰りましたよってお父さんが決めてそれに従わないとダメなの。」と言う紹介をした別のメンバーは、「だから私もそれを見てきたからこそ、そういう亭主関白過ぎる家だったからうちは、そういうのが嫌で、嫌なだけででも何かあがれるところがある。」気持ちの中のアンビバレントを表明する。

その次には、別のメンバーより「スケジュールとかはおとうさん全然なくて、なんかおかあさんか、むしろおねえちゃんとかが全部組んで、それにおとうさんもついてくるみたいな感じで、（ということは、そう思ったけど）亭主関白じゃないのかな。」と当初の見立てへの留保が語られた後、「だけど絶対最終決断はお父さんにまかせるみたいな感じが。何か私が勝手にこの大学受けるみたいなこと言ったりしても、それはちゃんとおとうさんに相談してからみたいな、絶対にそういうのある。」と決定事項の内容によって父親の関与に違いがあることへの言及につながる。母親が父親を立てているという見立てと、「おかあさんが、おとうさんには言わないからいいわよ。」と別の決裁をする例も出された。

さらに、「なんかそのときの決めることによっ

で最終的にまあお父さんに相談とかしたりもするときはあるけど、別に結局決めるのは自分だから。」と、ことと次第によってはメンバー自身の自己決定が鍵となることの表明もあり、それに対しては「ふうん、自立してんだね。」という反応が出る。

お金が絡むことに関しては「やっぱり家のお金だし、お父さんが稼ぎ手だからそれでやっぱりそういうところで相談しないとねっていうのはあったりするけど。」という語りに続いて、別のメンバーより、「今聞いて思ったんですけど、お金の話で、それって結婚とかしてから専業主婦だと亭主関白で、さっきの食事の話とかも変わってくる？専業主婦とかで、何か決定をお母さんの方がするっていうのは結構難しいのかなって思ったんですけど。仕事は続けていたいとかそういうのが関係してるのかなって。」と夫婦の「力関係」に及ぼす稼ぎ手役割の影響が語られる。

しかし一方、父親母親がともに自宅で仕事をしているメンバーからの次の語りは母親も金銭収入を担っているからといって「上」に来るとは限らない例である。「うちは、ちょっと特殊で父も母も常に家にいる。でも、二人とも仕事はしてて、お母さんと父は違う仕事をしてる。家にいるけど、専業主婦じゃないの。事務とかもするし、家事全般もするの。けど父親は、常にいるっていうのもあって、お母さんを専業主婦っていう感覚でみていると思う。だから、家庭の仕事、掃除もご飯もやりなさいって。母親として、やるべきこととして子育ても含まれてたばくって・・・。」

続いて、父親が娘の大学進学についてどの程度強い意見を述べたかに関するいくつかのタイプに関する紹介があった後、次のような発言でこのセクションは次へと移行する。「何か今思ったんだけど、うちら女だから。お母さんにそういう、なんか悩みがあると相談するっていうのが多いって

のは女の子だからかなあって。相談とかをお父さんにはしないっていったじゃん。でもさあ、おとうさん子だったらするしみたいな、あまり関係ないっていうか関係あるのかなあ。どうなんだろうね。」

### 3) 恋愛観に与える男親の影響

「話を恋愛の話に戻して。好きなタイプがおとうさんっぽいひと（問いかけ）？あ、意外と少ないなあ。」かじ取り役が恋愛観に与える男親の影響に話を展開する。「私はもうおとうさんみたいな人、絶対結婚したくないと思って。」という発言に対しては、「え、そう思っても好きになっちゃう。」が皆の爆笑を呼んでいる。「何か家全体を守ってくれるのがお父さんって感じがするから、自分もだんなさんに守ってもらいたいから、家庭を。だからかもしれない、おとうさんがいいって思うのは。」とか、「この人お父さんと違って超いいとかって。」とそれぞれ逆ではあるが父親からの強い影響が語られる。

一方で、全く別の意見としては「私はそのときによって好きになる人は違うから、結構。なんていうか、いいところもちろんお父さんにはあるけど、こういう人と付き合うの嫌だなって。」と、これかあれかに決めない語りが出される。また、「似てないと思っていたけど、よくよく考えてみると似てるかも。うち、共働きで料理、掃除、ゴミ捨ても分担しているし、なにかを決めることも自分のことは自分で決める。だから、私についても両親はアドバイスはくれるけど決めるのは私かな。家族一人ひとりがわりと自立してるかも。」

と新たな気づきも語られた。

そしてこのセクションは、さらに父親似是嫌、と断言する意見や「お父さんみたいな人っていうか、似て欲しい部分と似て欲しくない部分があって、家のお父さんは怒っても暴力とか絶対ふるわ

ないし、家族のために頼んだらやってくれる感じでそういうのはいいなあって思うけど、ちょっとせっかちなのがいやだ。」といった発言が続き、さらなるこだわりの話へと移行してゆく。

#### 4) 恋愛におけるこだわり

##### ① 体と心

「何か男の人に対して当たり前って思ってることってありそうだね。それぞれ。それを言っていこう。」という問いかけに対し、「すごい根本的な話なんだけど、好きってのが全然違うことがあった。あたしの思ってる好きと相手の思ってる好きが違った。」という語りがあり、そこから自分が当たり前と思っていることと、相手のそれがずれているとうまくいかなくなることに向かって、まずは心と体の関係がしばらく語られた。「恋人とじゃないと手をつながないって人と、別に友達でもつないでもいいじゃんて人と・・・。」というような表現から始まって、「何か、(照れた笑い) 気持ちが行くのが嫌なんだよね、うちらは。何か別にそういうことをするだけの関係ならいいけど、・・・すごいリアルだね。でも・・・の方がいいな。気持ちが行っちゃってるほうがいやだ。」「いやーだ。」「例えば、その人たち(自分の恋人と他の女性)が、一晩だけ一緒に(=体の関係がある)、って思うのと、一週間ずっと毎日、そういうこと(体の関係)がないけど遊んでる(のと比べると、後者の)方がいやだ・・・って(メンバー同士で)話してた。」と例え一晩の関係があっても、単なる「遊び」であれば「許す」という意見と「絶対無理、無理。」という拒絶反応とが表明され、これらが、様々な付帯状況の差を想定しつつしばらく語られた。

さらに当初亭主関白がいいという表明をしたメンバーの次の発言(気持ちが別の女性に対して向かってしまうよりは一晩の「過ち」の方がましだ

と言う意味内容)「一週間毎日会っていいの?」って(疑問に)思う理由は、別に一週間会ってたけど何もしてないからいいじゃんみたいにおもわれるのが嫌だし、やだ。なにもしてない(体の関係はない)からっていわれるのが嫌だ。でも、もし決定的な事項(体の関係)があれば、謝るしかないじゃん。折れるしかないからそっちの方がいいじゃん。」に対して、「え、何かさっき・・・、どうしようかな・・・。(亭主関白が良いって言ってたのに) それって自分が上じゃない? それって。」との指摘がなされる。これに対しては「ああ、それとはちょっと違う。」との回答。

さらに、「一晩の(過ち)の方がいやだ。」「私はでも一晩の方がいい。何か男の人とかって別に気持ちがなくてもそういうことができるから、別に(自分に対して)気持ちがある(好きだと言う気持ちは変わらない)状態で、1回だけでしょ? 1回だけだったら。」「じゃあ2回だったら?」などと続き、別の見解が提示される。「何かちょっと話し違うけど、私は別になんも言われずに何かされるのは別にいい。自分が知らなければ。」「それがさ、後でわかったらどうするの? 友達とかに実はお前の彼氏さ・・・、みたいな。」「知っちゃったら、考えるけど、知らなかったら別にいいかなって。」「それは同意する。隠すなら最後まで隠し通して欲しいよね。」これに対して「やだよね。」と反対意見が出され「え、全部やったことを俺こんなことして、って言ってほしいってこと?」の質問に「うん。(だってそれって)裏切りじゃない。」と続く。ここに来て場の雰囲気は、やんや、やんやのざわめきに包まれている。

しばらくして、あるメンバーから、自分が逆の立場、すなわち特定の相手がいながら別の男性と遊びに行くとしたら相手にそれを報告するのかという問いかけがなされ、「彼氏が知ってる人ならいうけど、知らない人なら言わない。」「言わない



ね、かくす。」という回答に対し、「そう言うってことは、全部相手に言ってるのは無理があるかなって。」と立場を置き換えた考察に展開していく。「なんか自分が（相手に対して）してって言ったことはあたしもしなきゃいけないって思うのよ。」という見解には、「えらいね。」と続き、「自分を棚に上げられない。」というたみかけに対し、「（自分なら）チョー（棚に）上げるよね。」と明るくダブルスタンダードも語られる。

話題は、相手と自分の価値観の異同に基づくコミュニケーションの問題、つまり互いがこれは言うべきと考えている範囲にずれがあるとうまくいかないという内容に展開している。「何かあるよね、言うべきことといわないこと。」「言わないけど、自分達の中でこれは言わない、これは言うみたいに決めてるわけじゃないけど、自然になんか言う範囲といわない範囲多分あると思って。」「これは言うべきでしょみたいな「べき」がある。」「あるある。」「それが相手と違ったら、けっこう「え？この人と違うかも」って思いそう。ちょっとやっぱり違うなって。」互いに妥協もしつつそのカップル間で男女のバランスの差はありそうである。最後に「笑いのつぼ」や「金銭感覚」の一致も指摘された。

## ② 遠距離恋愛

「あと、遠距離とか絶対無理、私は。距離も問題あるよ。」遠距離恋愛の話題、すなわちこだわりにおける距離的な近さや会う頻度の点に話題が転換する。「遠距離の距離ってどのくらい？」と会えないことの意味づけ確認が始まる。「東京と北海道みたいな？」「土日は頑張れば会えるみたいな。」「行くのに1万円以上かかる。」「（東京から）静岡あたりまで」「関東甲信越なら」「関西くらいまでいけるよ。」など多様な感覚が語られた。

遠距離恋愛の成否を判断する基準として、「遠

距離ね。付き合ってるイコール絶対だよってのがお互いあるなら遠距離も平気だと思うけど、付き合うことがそもそも会いたいみたいなのわべっていうか、あれだったらけっこう無理だよな。不安になるっていうか。前提に不安になるのがあるんだったら無理だと思う。」と相手との結びつきの深さのようなものが語られ、「えっと、あたしはどうしても近くにいる人に頼るようになってからそっちに心が移っちゃうかな、・・・（あー）自分がそういうタイプだってわかってるから遠距離ってしちゃいけないなって。」と言うような志向も出されつつ、「でも今忙しくてなかなか会えないと思うんですけど、彼氏と。そういうのは平気なの？遠距離の場合でも会えないし、会えないのと同じじゃないですか。」という指摘が入る。それに対しては、「でもなんか近くにいるのといないのじゃ、いざって時に違う。行こうと思えば行けるみたいな。」と切り返しがあって、会う頻度の確認が入る。「週一くらいで会えたらいいかな。」「2週間に1回。」「1週間しか耐えられない。」「でも、私2週間って思っても1週間で会っちゃいそう。」「自分で決めても多分無理だよ。」など現在交際中のメンバーの感覚が提示される。

「私は最初っから遠距離だったら無理なんだけど、最初は近くて途中から遠距離になるなら平気で、でもその二人には結婚するっていう・・・、私なんか、付き合うとちょっと結婚考えちゃうんだけど、そういう気持ちがあれば遠距離でもそのくらい全然会えなくても長い人生の中のちょっとした4年とかそのくらいなら。」と、次に来たのは結婚と結びつく交際か否かの指摘である。

この話題展開はそれぞれの経験も踏まえた単身赴任への想像につながっていく。「何だっけ、それ、単身赴任。」「絶対無理だな。」「え、ついてっちゃう。」「絶対ついてく。」「わかんない、ついていかないかも。」「自立してたら（自分も金銭収入

を伴う仕事についていたらと言う意味か) いけない。」「だったら話変わるけど、夫の転職についていけるように手に職をつけたい。」等々将来の夫の転職に同行するかどうかの話題が始まる。

自分の家庭を踏まえて「単身赴任のほうがいずれ仲良くなる気がする。お互いの存在を、うちの家庭の場合はそうだったから、離れてると普段気づかなかった相手の存在とか気づくと思う。」という語りもあれば、それに対して「何か会えないほうが薄れそう。」との指摘もある。「遠距離とかもそうだと思うんだけど、月に1回しかとか会えないじゃん、そう思ったらその時間を2人でフルに使おうとか、毎週毎週会えてたら、今日何する? あ、家でいいんじゃないって言う感じで、そういうのもすごいいいことだと思うけど、遠距離だと逆に今日何しようかって1日をフルに使って1日を楽しもうね、みたいなそういうぎゅって詰まる感じがあって。」という肯定派に対しては、「遠距離から戻った時大変じゃない?」「うん何かきゅうくつになりそう。」との懐疑派が返す。このようにして恋愛のこだわり(遠距離恋愛編)は終わった。

## 5) 交際と結婚

最後のテーマは「付き合うときに結婚考える人?」という問いかけで始まった。「付き合うときっていうか付き合う中で。」「あ、中でだったらわかるな。」「最初っからこの人と結婚するって思っつけあうって(疑問)・・・。」「今いないんですけど彼は、でも次の彼はきっとこの人と結婚するぞって人になる。」「考える。相手にもよるけどね。」

この話題は、現在交際が進行中のメンバーによる違った感覚が以下のように提示される。「女の子が考えるそのこの人と結婚って言う考えと、男の子が考えるのと違うよね。」「違う。」「稼がな

きゃいけないしね。」「何か軽々とは言ってこないよね。女ほどは。」「え、そう? 男の方が軽いと思ったけど。」この話題は交際において結婚をほめかすことに対する「軽い」「重い」という評価の話題として展開し、「みんなの彼氏がどういう人か知らないけど、職にもついてなくて、お金が稼げてないくせに結婚しようねなんて無責任すぎと思う。」に対しては、「好きすぎるんだな、好きな気持ちの延長にしか過ぎない気がする。」という見解も提示された。「軽いと思うから言って欲しくない。自分が言うなら全然いいけど。」という見解には男女で基準が違うことが示されている。

そこで、そもそも交際時に結婚を意識の中で前提とするか否かの感覚を掘り下げてゆくことになる。「結婚願望あるから、結婚する気がない人ならいやだ。だらだらつきあって、全くする気がないなら別れてくれって。結婚願望があるから。結婚したい。」「それはあるかも。」「付き合っていない段階から結婚考えて彼氏選ぶから、あっちが結婚考えてなかったり、私がもうこの人といっしょにいけないと思ったらもう別れてる。」としばし、21歳現在で進行中のまたは今後始まる交際は結婚を前提としたものであることが何人かのメンバーより語られた。

それに対して次のような別感覚もある。「・・・っていうかみんな結婚考えてるんだね。びっくりした。なんも考えてないから、私は。今みんなの話をずっと聞いてて、私が今まで付き合ったときに、なんか最初の段階で、この人と結婚することはないだろうなって思ってた、付き合ってる。」これに対して「へー。」という反応があり、続いて「いつかは別れちゃうのがわかる人としかつきあったことないから。」に対しては「昼ドラだ。」との反応。しかし結婚を前提としない感覚を持つメンバーは1人ではない。「なんていうのか、自分

も今結婚する気ないし、今結婚しようとか言われたら絶対嫌で、多分わたしは年上の人ばかりだったから、年上の人で年齢的にもう結婚してもいいんじゃないかって人ばかりだったから、つきあってって言われても今私そういう気ないけどいい？ってきいてから付き合ったことはあるし、何か自分の中で、もう20代はばりばり働きたいってのがあって、まあ30手前くらいで結婚できたらいいなってのはあるけど、今付き合ってるとか、付き合う人とかで、ほんとに年も近くてずっと付き合っていけるって人がいたらその中で結婚とか考えると思うけど、今までがずっとそういうのがなかったから、皆すごいなって思った。」「わたしも似てて、私自身もまだちょっと子どもってのもあるんだけど、結婚に関してあんまり意識をしてないから。で、わたしも20代はけっこう働きたいのね。だから今別に結婚考えてこういう人がいいとかいうのはそういうのはあまり考えずに、いろんな人とつきあっちゃってもいいんじゃないかなってのが私の中であって・・・、いろいろ経験積んで・・・。」

これらの見解を踏まえて、結婚を前提の交際であることを言明した前述のメンバーより次のような考察の深化が語られた。「今彼氏がいなかったらこの2人と一緒に、ばりばり働いてその中で何かあればいいかなって思うけど、今多分特定の相手がいて若干結婚とか考えちゃうから多分いろんな考えに影響が出てるんだと思う。それがすごい迷惑で今悩んでいます。」これに対しては、「幸せだよ幸せ、迷惑じゃなくて。あははは。」と他メンバーから反応があり、場はなごやかである。

その後も「私の友達で、男はやっぱり家族を守らなきゃいけないイメージが強い子がいて、だから結構いいところに就職したいんだよね、って言って、それで家族とか奥さんを守ってあげたいって。そのこは男の役割というか、男と

して家族のためにできることって、子どもは産めないし、家族を守ること、お金を稼ぐことしかできないんじゃないって言ってた。」「カッコいいね。」「だから自分は将来きちんとお金を稼ぐために、大学に行っていっていいところに就職したいって言ってた。」「彼女がいる人？」「いないんだけど。」「すごい。」「ちゃんとね、しっかりしてていいと思う。カッコいい。」「ちゃらちゃらしてんのやだね。」というように発言内容は結婚を前提とする交際についての声の方が前面に出る形でこのセッションは終了した。

## 6) まとめ

フリートークの最後5分程度に来て、自発的にまとめの語りが全員から出された。

吉本祥子「なんか最初亭主関白の話してたじゃん、亭主関白がいいと思って、今も自分の結婚を考えたら亭主関白が理想なんだけど、実際に特定の相手と付き合ってみると、自分が上に立つことになっちゃう……。だから、亭主関白の是非については、私の中で理想と現実のギャップがあることに気づいた。また、相手によっても私の構えが変わってくるので一概に亭主関白がいいか嫌かということが言えなくなるって思いました。

紺野桂子「はい、ちょっと近いんだけど私は最初亭主関白がいいっていったじゃないですか、で、ずっとついていきたい派だったんだけど、私プライドちょっと高いし、自分の性格を見ると、やっぱり、自立して働きたいし、そういうふうに分で思ったから、そういうしっかりしている人にあこがれるんだけど、そういう中でも自分を持っていたって気持ちがあるんだなって思いました。」

渡部英里「育ってきた家庭環境と、両親の関係が、私の恋愛関係に出ているなあと思いました。(今の彼氏も) 最初から価値観は似ている部分もあったけど、私が私色に染めた？」・・・他のメ

ンバーから「でも多分えりも彼氏の色に・・・、染まりあってるんだよね。」

齊藤倫子「こだわりとか別にないかなと今日思いつつ望んだんだけど、好みのタイプのこととか、遠距離だと無理とかいろいろ掘っていったらありそうだなって思って、何か自己覚知まではいかないけど、ちょっと自分の中の価値観みたいなのが見えてきたかなって。」

齊藤彩加「さっき自分の価値観とかは育ってきた環境とか家庭環境で違いが出てくるのかなって話だったんだけど、自分の将来の形ってのは、自分の今の家族がやっぱ理想っていうか、そういうものになっているのかなって。」

清水翔子「多分私は今彼氏がいなくてからどんどん理想が膨らむばかりって感じ。こうだったらいいってのがどんどん理想化しちゃってる。でも何か、私は亭主関白いやって言ったけど、気遣いの出来る亭主関白はいって、考えたらそれちょっとありかなって思って、これから付き合う人が亭主関白でも受け入れられるかもしれないかなってちょっと思った。」

高原茉里「こだわりもってあるかなって思ったけど、あんまり何も考えてなかったかもって思った。今まで深く考えたことなかったのかなって思ったみたいな。うん、今まですごい頼るってのが理想だったけど、話してくと男性に頼ってついて行くというよりも、すでに出来上がった軸で動いている自分を見守ってくれるのが理想なのかと思う。そう考えると、頼ってる振りして、意外と自分中心で考えてる頑固なところもあるかもしれない、自分ってやなやつだなんて感じでした。」

村岡美奈子「恋愛におけるこだわりっていうか(恋愛自体)あんまり、そんな数多く経験してないので、すべてにおいて今話し合ったこと、自分が今いったこととかをほんとに恋愛においてこだわるかって言われるとわからないかも、って最終

的には思って、難しいなと思いました。」

津田美由季「結構身構えて、付き合う時は結婚前提にとか考えてたんですけど、みんなの話をきいて結婚とかそういうことをあまり考えずに色んな人と付き合うのも必要かなって思いました。もっと気軽に。」

池田佳奈子「えーなんだろう。意外とみんな結婚意識してるんだなって思って安心。自分はこの人と結婚したいっていうよりは、ただ結婚願望が強いところがある。けど、みんなが言ってたのを聞いて、意外と(付き合ってる人と)結婚したいって思ってもいいんだな。結婚意識して付き合うのは重いって思ってたけど、口に出さなくても結婚を思いながら付き合うのはいいのかなって思いました。」

安晝真妃「みんなと話してみても、自分がどこのグループに属するのかじゃないけど、皆との共通点を見つけることができたし、逆に自分とは全く違った考え方持ってるんだなって言うのがわかって良かったです。結婚や人を好きになるって事を今まで深く考えたことがなかったんで、結婚について考えなきゃとか、今ある自分だけじゃなくて、将来のこととか、皆と話したことで、いろいろな見方ができてよかったです。」

齊藤加奈子「結婚願望については何か私そういうふうな願望を持てるような人とまだつきあっていないと改めて思い、付き合いたいなあと思いました。あと、理想と現実の違いみたいのをちょっと感じた気が。みんながお父さんの話とかで、実際は嫌だけど、でも結局そういう人だったりとか、あと自分の中でも一応自分の中で組み立ててるそういう関係がいいってのあるけど、実際につきあったときとか今までで考えると結局違った形になっていることがあって、だからまあむづかしいなって、改めて思いました。」

#### 4. フリートークを踏まえたディスカッション

本授業の最終回、2008の1月9日には、小山（教員）から以下の4点についてフリートークを踏まえたディスカッションをするように要請した。これらの課題は同時に同月23日を締め切りとする最終課題レポートとしてさらに個別の検討も深めることを前提としていたのは前述のとおりである。当日は学生による生き生きとしたディスカッションが展開した。

（課題）社会構成主義の考え方から学んだことを踏まえて次の点に回答してください。

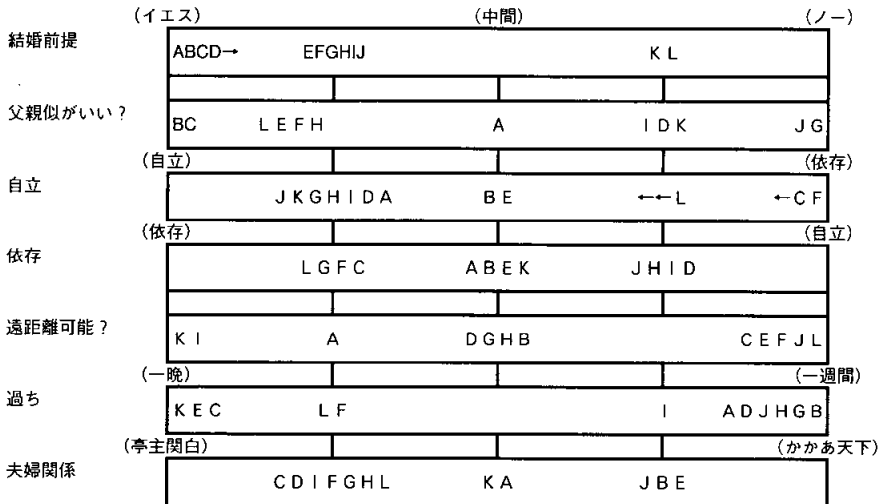
- ① 今回のフリートークを通じて各自の恋愛観の立ち位置はどのあたりにあると思ったか。
- ② 「価値中立的な言明は存在しない」という言説を踏まえて、各自の語りを振り返ったときに、排斥するかもしれない「人」が想定でき

るか？

- ③ このグループのグループダイナミズムについて思うところは？
- ④ 前期から通してこの1年を振り返ったとき、自分に関して語りなおしの必要を感じるか。感じるとしたらどのようなか。

#### (1) 恋愛における各自の立ち位置

これに関しては、トークの中に出されたトピックごとにYesからNoにいたる座標軸上にそれぞれの位置を配置する以下のような図をまとめ、ゼミメンバー各自の主観による位置づけを配置し、各自のこだわりがより自覚されると同時に、語り合った後に多くのメンバーが座標軸上で今いる位置より中間方向へ移動したことの実感が語られた。



- \* A～Lはメンバー1人1人をあらわしている。
- \* 各項目に主観で大体の位置取りをした上でディスカッション後変化を感じたメンバーについては矢印で方向が表現されている。
- \* 「自立」と「依存」はどちらも経済的、精神的両方を意味している。
- 両項目の配置が完全に対称を示さないのは、メンバーにおけるアンビバレントな感覚や複雑な状況を示すためと考えられる。
- \* 「過ち」は便宜上「気持ちはなくて1回性的な関係を持った」と「性的な関係はないが好意がある」を対置している。
- ただし、両者は二者択一に論じられるものではない。

図2 トピックごとに見る各自の立ち位置

## (2) この語りを通じて排斥する人が存在するか

ディスカッションの中ではそんなに深化した議論はなかったようであるが、それでも交際のときに結婚を前提とする人としらない人との間では軽く「偏見」の目が互いにありそうだという認識は出されている。つまり結婚を考えて交際する側からはそうでない人々に対して「チャラいな。(ちゃらちゃらしている)」が、また結婚を考えない側からは「お堅いんだな。」という感覚である。

## (3) グループにおける各自の役割

グループダイナミズムに関しては、フリートークやディスカッションにおける各自の役割がまずは大まかに3つのタイプに分類された。それは、饒舌に語りながら一つの事柄を表現する「10⇒1」タイプと、言いたいことを適度な分量でそのまま表現する「5⇒5」タイプと、そしてずばりと短いセンテンスで多くの内容をまとめて表現する「1⇒10」タイプである。それぞれの中にバランスよくメンバーが4人ずつ配置されるとの承認がディスカッションを通じてなされ、かつ最終的には楽しみながらそれぞれのタイプに対する命名がなされている。以下はそれぞれの命名とその心である。

### (10⇒1タイプ)

高原菜里：スイッチ型⇒グループのリーダー役として、ディスカッションの時にみんなの意見を尋ね、スイッチを入れる役目のため。全体の意見がまんべんなく表明されるように、みなに発言を振る役をとった。

村岡美奈子：スブラッシュ型⇒ディズニーランドのアトラクション、スブラッシュマウンテンからきている。しぶきが大きく上がるように、スイッチが入って話し始めると、どんどん話すという特徴がある。

吉本祥子：ジジ型⇒映画『魔女の宅急便』に登場

するキャラクターからくる。普段からさりげなくグループを引っ張っている様子があり、メインではないが、いないと成立しないというサブキャラクター的な雰囲気を持つ。

池田佳奈子：ジーニー型⇒『アラジンと魔法のランプ』でランプから登場するキャラクター。ユーモアたっぷり、みんなの雰囲気を明るくする。また、しっかり頼りになる、助けてくれそうというイメージである。

### (5⇒5タイプ)

津田美由季：孫の手型⇒皆が言いたくてもどのように表現してよいかわからなかったことについてかゆいところに手が届くように的確な表現をする。

清水翔子：びっくり箱型⇒おめず、臆せず、突飛な意見や表現方法で皆を驚かせる。

紺野桂子：セーラームーン型⇒漫画、『セーラームーン』に登場するヒロインのキャラクターからくる。戦闘態勢に入る瞬間があり、やや控えめで穏やかな印象から、ずばずばと意見を言う雰囲気に切り替わる。

安晝真妃：コナン型⇒なにも考えていないとの自認とは裏腹に、みんなからは思慮深い発言があるという受けとめがあるため、見かけが子どもで頭脳が成人という少年のキャラクターコナンを命名。

### (1⇒10タイプ)

渡部英里：エリザベス型⇒ずばりと結論を言った後にそれを深める発言をしてゆくタイプで欧米人風ということから本名のえりにかけてエリザベス。

齊藤倫子：火山型⇒皆と意見がかぶらないように、じっと自身の中で暖め、考えてきた内容を、あるとき爆発的に発言するところから。みんなとは少し違う意見を言う。

齋藤彩加：リアベ型⇒みんなの意見を聞き、それを踏まえた上で自分はどうかと振り返り、十分考

えてから発言するタイプとしてリアクションペーパー型の命名。すなわち回りの意見をじっくり聞いて、落ち着いて自分の考えをまとめるイメージ。齋藤加奈子：バタ子さん型⇒漫画アンパンマンに出てくるキャラクターから。一種独特な存在で、世話好きで的確なまとめ役。

## 5. 最終レポートを踏まえたまとめ

### (1) 保守的ということをめぐる

小山（教員）の目から見たゼミ構成メンバーの語りは、一言の印象で言えば恋愛と結婚の関係や男性に期待するリーダーシップなどにおいて、「思ったよりも保守的である」というものであった。語りを丁寧にたどると、自他の多声に対する開かれ方は十分に伝わってくるにもかかわらず、小山（教員）がそのように感じるのは、自らの立ち位置によるものであろう。小山（教員）は20代の半ばに留学先である北米の大学院で知り合った同年の留学生仲間と30歳で結婚をして21年になる。別の修士課程で勉強中だったパートナーよりも先に修了して帰国し、数年遠距離恋愛を続ける中で就職も相手より先にしている。その間、揺れや迷いが全くなかったかといえば嘘になるが、しかしパートナーより先に就職を決めたときの感覚は、ひとことでいえば「ラッキー」というものであった。つまり、「(将来パートナーが就職活動をするときに、勤務先の場所や転勤の有無などは)先に仕事を始めた私の都合にも合わせてね。」という「早い者勝ち」の感覚である。その背景には、幼少期から経済的な収入を伴う勤務についていない自分を1度もイメージしたことがないというものがある。そして自分でそうイメージしたとおり、結婚後も出産と子育ての休職期間1年半を除いて、フルタイムの仕事をやめたことも休んだこともない立場からゼミメンバーの語りに触れたとき、特に相手の都合に合わせて自らを柔軟に

動かそうとしている姿勢での発言を、「自分の主観」との「違い」として印象深く感じたということであろう。

「保守的」と言う言葉はどのような響きをもつのであろうか。人によって「堅実でまじめ」と取ることもあれば、「古臭い」ととることもあろう。しかし、彼女達の語りと最終レポートを分析すると、そのようなポジとネガの両論は、もちろん単純に過ぎることがわかる。

渡部英里は「自分は意外と特殊な恋愛観を持っているのではないか、と感じた。」と述べる。「互いに自立した両親の元で育ってきたから、付き合い合っても彼氏に頼りきりというのは嫌であり、恋愛に臆病者であるがゆえに付き合う人には別れのない結婚を前提として考えてしまうのである。そして、この恋愛観は弱冠21歳という女性にしては珍しいのかもしれないと感じた。」彼女の言う「特殊」は自立志向と臆病者の組み合わせを意味するのだろうか。相手を自分の色に染めると言い切れるくらいの「強さ」と「臆病者」の組み合わせがユニークである。

保守派路線を先導したように見えた吉本祥子は、家庭環境の影響を語りつつ、次のように多声へ開かれていった。「自分の恋愛に対する考え方がはっきりとしていることがわかった。フィードバックの図を見ても、一番右か左に私のマークがある。「遠距離恋愛の是非」や「結婚を前提に付き合うか」などの項目では特に強い意志があって、即答した。そしてどちらかというと男性に依存する傾向があり、それは私の家庭環境に大きく影響していることがわかった。私の家庭では父親が働き、母親は専業主婦、また父親が家庭の舵をとっている。そして私が好きになる人は、その人のことを知れば知るほど、父親に似た部分を垣間見ることができる。(中略) 自分にはまだまだ語りなおしが必要があることを感じた。上でも述べたよ

うに、私は恋愛に対して「こうしなければいけない!」「どちらかにしなければならぬ」という思いがあり、無意識のうちに自分の価値観を狭めていたような気がする。この価値観は人の意見に対して壁となってしまう、結果的に誰かを排斥してしまう可能性を生み出しているのだ。」小山(教員)は、彼女の語りを「堅実に家庭を守りつつ、自立して働く」という表現に組み替えることで「保守」というステレオタイプなラベルをはずした。

齋藤加奈子は交際するときに特に結婚を意識しないと述べた数少ないメンバーの1人である。「私は交際する際、交際＝結婚と捉えたことがなかった。それは今までの経験や今まで考えてきたこと、私のキャリアプラン(20代のうちはバリバリ働きたい)などが要因であると思う。それに対し、グループの大半が反対で結婚したいと思って交際をするということであった。その際みんな最初は驚いた様子であったが、語り合う中で違う意見であっても「へー」「あー」などとそれはそれで受け入れようとしてくれていることを感じた。そして私自身もみんなの発言を聞いて少し意識が結婚に近いものに見えるように変化したと感ずる。」と言っている。これは彼女のフリートークにおける「結婚願望については何かわたしそういうふうな願望を持てるような人とまだつきあってないなと改めて思い、付き合いたいなあと感ずました。」というような、出来そうでなかなか出来ない着眼点の移動に現れていると言えよう。

## (2) 家庭環境との関連で

語り全体を通じて、私達がいかに出身の家庭環境に影響を受けているかを改めて認識することになった。父親似が理想である人も、また父親のようなタイプの人は選ばないと言う人もどちらも父親の影響を強く受けた嗜好の表明であることに違

いはないだろう。ただし一方、あまりそのようなことは考えたことがないという意見もあった。最終的には出会った人とのそこで展開される関係の中にしか正解はないことを示したのは村岡美奈子である。「恋愛におけるこだわりっていうか(恋愛自体)あんまりそんな数多く経験してないので、すべてにおいて今話し合ったこと、自分が今いったことをほんとに恋愛においてこだわるかって言われるとわかんないかも、って最終的には思っ、難しいなと思いました。」たしかに今回のフリートークには、今現在交際相手がいる人の語りと、過去の経験やそれを踏まえた理想像を述べている人の語り混在し、違った響きで伝わっているということは考えておかねばならないであろう。

それにしても、家族という実にプライベートで固有の集まりについて言及せざるを得ないこのような語りにおいて、それ自体が各自のコアを形成するものとなっているだけに、自らが「当たり前」とすることの相対化は難しい。そして、そのコアを形成した場所にポジティブな思いを持っているほど、それを明るく語ることが、場合によって誰かの語りづらさを生み出す可能性について考える必要もあるだろう。

私達が強い影響を受けてきた家庭環境を振り返り、それを背負って次世代の家族を形成しようとする時、ある意味で理想に向かって努力することそのものがその外側に置かれる交じり合えない他者を生み出す可能性について常に感受性を高めておく必要があるだろう。今回の語りあいの中では、このゼミメンバーがなかなか実感しづらいような家庭環境にある人々ないしは、多くの同世代とは違った嗜好を持つ人を排斥する可能性について、津田美由季が指摘している。「今回皆の共通項として恋愛へのこだわりを取り上げたが、これは女の子なら恋愛に興味があるだろう、それが当たり前であるという前提があり女性で恋愛について関



心のない人を排斥する可能性があると思う。また、付き合う相手が父親に似ているかどうかや両親の関係についての話し合いも、家族がいて父親についてよく知っているという前提があり、生まれた時から両親がいなくて父親について全く知らないなどという人は排斥されてしまうのではと感じた。このようなことから何が当たり前なのかは定めにくいもので、場所や集まる人によって当たり前がまったく違うものであることを改めて感じた。」確かに、異性と付き合っただけで、誰か異性を好きになって当然という雰囲気になじめない人もいるはずである。

### (3)「今、そこ」にあったゼミメンバーの「当たり前」

50代に入った小山（教員）の目から見たときに、ゼミメンバーにとっての恋愛は、なんと言っても場合によって結婚という「ゴール」の想定された現在進行中の、ないしはこれからの出会いを含めて「思い合い」のプロセスを探ることを想定したスリリングなものである。そういう未婚の彼女達は「こだわり④体と心」の部分で語り合ったように、現在の社会において婚外セックスが認められないことになっているという原則を敷衍する形で、特定の、ないしは想定上の交際相手には「誠実」さ、「裏切りのないこと」を求めていることが見て取れる。気持ちに他に移ってしまうことに比べれば「一晩のあやまち」は「許す」という構造は明らかに安定した家族関係につながるような交際を前提しているといえる。

また、小山（教員）を含め、ここで「心と体」という二項対立の表現をしたこと自体恋愛において性的な関係がいかに重要な意味をもつかということを示し、さらにいうなら逆説的ではあるが「心と体」を分けては論じられないものにとらえていることがわかる。セックスとはカップル間の

一連のコミュニケーションのあり方を計る物差しであるとともにコミュニケーションそのものである。そして、セックスを含む様々なコミュニケーション上のルールについて、それを互いがどうとらえ、どう臨むかということに関する合意がなければその組み合わせはうまく行かないと言う認識が明らかにされたと言える。

そして総じて、まだ原家族の扶養下にあり、着々と勉強をして世に羽ばたき、「秩序ある社会」の構成員となるための準備中である彼女達にとって「健全」と「安定」という「当たり前」がここに存在したと言えるだろう。前述したラベルとしての「保守性」は、この世代的特徴からも導かれるだろう。

それでは一方、上述のような秩序を整然と守る家族形態を想定しなかったり、想定できなかったりするグループや個人との関係はどのようなようになるだろうか。後期授業において、ガーゲンの著書「あなたへの社会構成主義」第2章『共同体による構成－事実と価値』<sup>12)</sup>を担当したメンバーは社会構成主義の四つのテーゼの1番目「私達が世界や自己を理解するために用いる言葉は「事実」によって規定されない」を念頭に、ある「不倫（というすでに価値中立的ではない言明）」の事例を設定して、「事実」の語りなおしをエクササイズした。その同じような状況を今度は第5章『「個人主義的自己」から「関係性の中の自己」へ』<sup>13)</sup>においては他のメンバーがとりあげた。そこでは、二分法に疑いの目を向け、新たな語りを生み出す生成的理論の考え方を、2章で取り上げた「不倫」を例に「良い－悪い」以外の語りで表現した。しかし、このような実践を実際に生きて動いている諸処の利害関係の只中において、前述の「当たり前」も踏まえて常に適用することは困難も伴うことが想定されるだろう。また、「恋愛」を上記のような、結婚云々はともかくとして、両者の「思

い合いのなる、なし」に向かったプロセス上でのみ配置されるものととらえた場合、それ以外の「語り」は排斥されることになるだろう。老若男女を問わず、「存在証明」への強烈な希求を満たし、支えるものとしての「恋愛（感情）」を彼女達は認めるだろうか<sup>14)</sup>。

ただし、「排斥」と言う言葉は強すぎると表現したのは、齋藤彩加である。「各自の語りによって排斥する人を想定することは出来るが、「排斥」という言葉は強すぎると感じた。普段の生活の中でも、自分と異なる考えを持った相手に出会った時「あ、違うな。」と感じることはある。しかしだからと言って、自分の価値観が正しいことを示すために、その人たちを押しつけようとするまでは感じないからである。よって、「排斥」よりも「偏見」が妥当な表現ではないかということでみんなの意見が一致した。そして各自の語りにおいて、「偏見」程度の感じ方によって“異なる意見を持つ誰か”を作り出している可能性はあるだろうという結論に達した。」いずれにしても、排斥、偏見、想像力外の人々を想定することは大切なのではないだろうか。

#### (4) ゼミにおけるグループダイナミズム

文字上のみではわからないフリートークの雰囲気は、小山（教員）が予想したよりも、真剣なものであると同時に、前期のエンカウンターエクササイズも通じて培ってきた相互のリレーションを感じさせるものであった。具体的には、特定のメンバーの発言に対して間髪を入れず、「えー！！」といったある種驚愕の声が投げかけられたり、価値範疇はプラスマイナスどちらとも取れる「チョー意外！！」といった声かけも頻繁であった。時に爆笑にいたる笑いが随所に埋め込まれ、全体を通して和気あいあいとしたものであった。

びっくり箱の異名を取った清水翔子は次のよう

に述べる。「ゼミのメンバーそれぞれが違ったタイプだと思った。だが、皆、それぞれの意見を尊重しているように思う。例え、自分と異なる意見や価値観を持つメンバーに対しても、反発するのではなく、「そういう意見もあるよね」と受容してくれる。だから、安心して突飛な意見でも述べることができる。私は、かねがねグループに協調する傾向があり、意見を述べるときは、グループが望むような意見を述べてしまう。しかし、このゼミグループでは、ある意見を大多数が支持しても、堂々とそれとは異なる意見を言えるメンバーがいる。そしてそれを受容する雰囲気がある。私が本当の気持ちを述べることができるのは、こうしたグループの環境が大きいと改めて思う」。

村岡美奈子は冷静に楔を打ち込むような形で別意見を出すことが多かった。外から見てその発言力は回りに左右されない強さを感じさせるものであったが、本人の最終報告ではやや反省スタンスで語られる。「自分は自分をマイナスの面ばかりから見てきたのではないかと思うようになった。確かに、振り返ってみて、これまで自分に関して、嫌だとかだめだとか考えることの方が多かったと思う。だが、それでも特に周りに迷惑がかかるわけでもないし、いいと思っていた。しかし、この考えが他の場面でも見られる自分のあり方になっているのではないかと感じられるようになってきた。実際に、最後の授業のフリートークでの会話を読んでみてそれをととても感じた。実際話合っている時も感じてはいたが、私は日頃マイナスで見る癖がついているせいか、他人に関してもつい責めたり、つい否定したりする傾向があるようだった。フリートークは、誰かを責めたり誰かの考え方を否定したりするのはやめましょうということで始められたものだったが、自分の発言を後から見てみても、結構危うい発言があったと感じた。」彼女は、自分をわかってほしいと、その

意見を他者に対して押し付けがちになったり、感情的に主張をしがちな傾向があったりすることを自覚して、そういう内面にある種の罪悪感を抱くとも述べる。

ゼミ連絡委員であり、フリートークにおいても自然な形でリーダー役を務めた高原菜里は以下のように述べる。「このグループの特徴は、様々な性格のメンバーが揃っているという事だ。恋愛についてのこだわりも、バランスよく配置されていると思う。そのことによって、自分自身の視野が大きく広がった。その経験から思い出されたことは、社会構成主義について学んだ中にあった、「対話の持つ力」<sup>15)</sup>の発表である。もちろん今回の討論は、自分の見方を少し違う角度から見る機会であったことには違いないが、グループでの「話し合いが持つ力」を実感できた。これが変化力を持つ対話に繋がるのではないだろうか。」

高原は続けてガーゲンの著書第6章で学んだ変化力のある対話の5つの要素からいくつかを取り上げて以下のように適用して論じた。「要素の2番目に「他者を肯定すること」というのがある。これはゼミだけでなく、社会福祉学科の授業の中でも多く学んできた事だ。メンバーはそのことを知っている上でゼミには臨んでいるだろう。しかし最初の頃に比べれば、自分の受容の仕方が大きく変化した。初めは人の意見を聞いても、否定はしなかったものの、「それはそれ」という考え方があった。自分とは別と考えることが、人の意見を受け取ったということだと思っていたのだと思う。しかし前期後期のゼミを通して、人の意見を自分の中において考えるという作業ができるようになった。それは私だけではないと思う。人の意見に対して自分の意見が正反対でも、否定せずに、でも自分の意見もしっかりと伝え、その共通点や異なる点、またそこからわかることなどといった、発展した話し合いになっていたと思う。これは要

素の4にも当てはまる。今までは自分の意見が自分には合っていて、他の人にはそれぞれ合ったものがある、という考え方だったが「多声性への期待」とあるように、正しいと思っている前提（自分の譲れない考え等）についても、疑ってみる、といった行為が、例えそれが会話を通して変化しなかったとしても、捉え方が変化し、深める事ができることがわかった。」

個人の中で多声に気づくプロセスを、前期に学んだカウンセリング理論も含めて論じたのは安晝真妃である。「この一年間を通して私が当たり前だと思っていたことが他者にとっては当たり前ではないということ痛感し、一定方向からしか物事を捉えていなかったということに気付かされた。現代社会の中にある慣習や常識は全て、誰かの関心や利害によって作り出されたものであり、有利な立場、また一方では疎外された立場になる（中立ではない）ということを考えさせられた。私は、今まで有利とされる立場に立つことが多かったのかもしれない。だからこそ、何の疑問も持たずに今のような生活を続けてきたのだろう。」安晝は、価値中立的な言明は存在しないことを認めつつもなるべく偏りのない「中立な」立場に身を置くことの重要性を述べた。「実際に今回の話し合いでも、結婚観・亭主関白の討論では、皆の意見を聞いたことでこんな考え方もあるのかと考えさせられた。特にこの二つの討論のときは、それぞれの家庭環境が大きく関わっているということを感じ、前期に行った精神分析理論など生育歴が関係するということを実際に感じる事ができた。また、討論時には頭の中で（ゲシュタルト理論における）図と地の反転が繰り返し行われ（亭主関白⇄かかあ天下）結果として、価値観が変化したことが2回目の話し合いの時にわかった。（図2参照）これは、自分で自分の価値観を疑うことで他者の価値観や考えを受け止められた結果である。この

ように、“当たり前”という考え方自体が私自身を狭い価値観に閉じ込めてしまうものだと感じた。“当たり前”を疑うことこそ、今ある私の価値観を広げることにつながる第一歩だと気付かされた。」

## (5) 語りの更新

「語りの更新」とはホワイトとエプストンによる「ナラティブアプローチ」におけるオルタナティブストーリーからくる表現である<sup>10)</sup>。私たちが言葉によって現実を構成しているのであれば、支援の活動を経て見えてくる新たな自分は「真の自分の発見」ではなく「語りの更新」であるといわれるその認識に基づいてゼミメンバーにも要請した。

池田佳奈子は語りなおしについて以下のように記述している。「自分の意見を語ってきた中でだんだんと変わってきた部分を感じる。私は、人目を気にしてしまう性格がある。よく思われたい・好かれたい・周りと違う意見を言いづらい・・・など人間関係を築く中で神経質になっている部分があった。エクササイズをした後の発表や、グループディスカッションの時も自分らしい意見を素直に言っているのか、周りの意見に左右されて発言しているのかと言われたら、少なからず周りの意見を聞いてからということがあった。しかし、一年間同じメンバーで話し合ってきて、私は素直に意見が言えるようになったと思う。ゼミのメンバーは、自分の意見もしっかりもっていて、さらに他の人の意見も受容している。自分が語ってきたことは、今とは考え方や受け入れかたが違うかもしれないが、現在はその時の自分以上の思いがあり語り直せるということは成長したと思える。(中略)話し合いの中で大切なことは、自分の意見をきちんと言えたかということよりも、その話し合いの中で刺激を受け自分自身を語り直すこと

だと私は考える。語り直しというと、ダメだからやり直しというイメージもあるが、自分自身を見つめ直し、語り直すという作業を通じて、私たちは自分を再発見したり、今まで気づいていなかった一面や能力に気づいたり、将来を構築したりできると考えるととても大切なことである。実際、一年間を通して私たちは、少しの疑問にも丁寧に話し合い、こうした語り直しの作業を繰り返すことによって、少しは成長できたと思える。人生の岐路に立たされて選択に苦しんだ時や、行き詰ってもう前に進めないと感じた時など、自然に自分自身の語り直しを心の中で行っていききたい。」

紺野桂子も自己理解の語り直しをしている。「自分が思っていた自身はこの一年で大分変わったように感じる。今回のトークでは全員で各自のイメージキャラクターを設定した。そこで私は「戦闘態勢に入る瞬間がある」ことから「セーラームーン」という名前が付けられた。正直思ってもみなかったフィードバックだった。私は「自分では人前では意見が言えない当たり前さ」を心の中に持っていた。しかし今回のトークでは自分のこだわりに関しては確かに積極的に発言していた。自分でも意識していないほど、これらを一年間のゼミの中で行えていたのではないだろうか。だからこそ皆の発話による他者理解と語り(ナラティブ)から新たな私が引き出され「私って本当は自己主張できるんだ」という自己理解に繋がった。これが代替案と呼べるのかもしれない。」

齊藤倫子の語りなおしは、関係の中の自己を体现するものといえる。「私は小さいときから、みんなが「こうだ!」と思うことに違和感を抱きながら生きてきた。今では、だいぶ柔軟に人と付き合えるようになった。しかし、たまにどこかで昔の自分が、「それおかしいんじゃない?」と訴えてくるような気がする。よく言えば、客観性はあるのかもしれない。だが、過去に蓄積された自分

の中にあるものと、しっかり向き合う必要性を最近感じている。その反省から自分がもっと生きやすいような代替案を見出していくことが大切だと考えている。他人の価値観をもっと柔軟に受け入れられる自分になっていくべきだと思う。私は多くの人と話す中で、良い方へ自分の価値観が大きく変化してきた。「私」という人間と自分が向き合うためには、他者に「私」を見出してもらう必要があるだろう。そして他者を理解することが自分を理解することにも繋がる。また、ボランティアや実習などを通じて、「当たり前」の感覚をもう少し見直していきたい。私の感じている価値観などほんの小さなものにすぎないだろう。様々な人の世界に少しでも歩み寄っていくために、多くの人との関係づくりをこれからも続けていきたい。」

小山（教員）から提示した課題に対する回答をさらに別の枠組みから構成しなおして、まとめた。演習授業を通して達成したことをゼミのメンバー間及び教員と学生間の関係の描き出しを通じて少しでも表現出来たことを祈りたい。

## おわりに

今回、このような取り組みをすることは、後期進行中の終盤に近づいて小山（教員）から提案し、意欲的に受け止められ想像以上に積極的な参加を得ることが出来た。今までも小山が担当する援助論系の各種授業において、学んだ理論や方法を実際の生活場面に適用して説明し、さらには実践することを理想としてきた。ただ、必ずしもそれは成功してこなかった。それは20歳前後という年齢の学生が持つ経験の限定や、教員からテーマの選び方について十分に的確な案内ができてこなかったことなど、関係の中で解き明かすべき事柄であろう。また、例え大学4年間で身につけ、花開かなかったことも、その後の長い社会人生活において実を結ぶということがあるとも考えられる。し

かし、今回冒頭に記したガーゲンの問いかけを「痛切に」受け止め、教員と学生が切磋琢磨した記録として残すことは、意味のあるものと信じたいし、何よりとても楽しかった。

ただし、このような取り組みの限界も指摘しておかなければならない。いかにガーゲンの問いかけを重く受け止めたとしても、大学という場における単位履修のシステムが大きく変化するわけではなく、現に本科目においても小山（教員）が最終的にゼミメンバーの成績提出の権限を有している。そのような構造的な力関係が厳然と存在する中における取り組みであることは再度自覚して言語化しておく必要があるだろう。これは、ある種の予定調和に向かって我田引水の結論を呼び込みやすい危険性もあるということである。また、恋愛にまつわる語りの中で、特に性の話題は大変重要で、かつデリケートなテーマであるだけに、教員が見守る大学における授業という枠組みの中では一定の制約があったことを清水翔子は指摘している。性にまつわる話に限らず、人が語る内容と語り方はその「場」の設定や語られる側との関係に着眼することなしに文言のみ抽出することは無意味である<sup>17)</sup>。恋愛に関する語りについて、特にそのような制約もあったことを自覚しておかねばならない。さらに、社会構成主義のもつ無限後退のループを考えた時に、多声に開かれることを良しとする、いわゆる「多声」と言う名の一定方向へ自動的に導かれる可能性も捨てきれない。

このような限界を自覚しつつさらなる取り組みに向けてメンバーは4年生になる。身近な他者との敬意に満ちたコミュニケーションの大切さを改めて自覚し、また無理やり合意を目指さずとも「多くの花が咲き乱れるがままにしておくこと」<sup>18)</sup>の意味とあり方を体感する第一歩となったことを信じて。

## 註及び参考、引用文献

- 1) ここで言う「語り」とは、フリートークやディスカッションにおける会話のみではなく、それらを踏まえて提出した最終レポートにおける文章や、それを見て発言した教員の言葉や送ったメールの文言など社会福祉演習Ⅰをめぐって交わされたあらゆる書き言葉と話し言葉を含むものとする。
- 2) 「言語のもつパフォーマティブ（遂行的）な性質」という考え方を敷衍して、このような形で書かれたものをまとめる行為そのものが私達のめざした「真の理解」の内容を表すと同時に「理解の実践」でもあるという意味をこめた。パフォーマティブ（遂行的）な発話と言う概念自体は、1950年代に英国の哲学者J・L・オースティンによって展開されたもので、発話内容が何かを陳述し、状態を描写し、正しいか間違っているかのどちらかのみではなく、その発話がさしている行為を実際に行っていることを示す。つまり発話そのものが行為ということである。  
ケネス・J・ガーゲン著、東村知子訳『あなたへの社会構成主義』p54。  
ジョナサン・カラー著、荒木映子・富山太佳夫訳『文学理論』p140。
- 3) ガーゲン前掲書、p23。
- 4) 國分康孝著「ゲシュタルト療法」、『カウンセリングの理論』誠信書房、1980にて学んだパウルズによるゲシュタルト療法が課題とする「今、ここ」にある感覚の覚知を大切にす姿勢からくる言葉。
- 5) ガーゲン前掲書、p106～p108。
- 6) 國分康孝著前掲書などを教科書として使用した。
- 7) 國分康孝、片野智治著『構成的グループ・

エンカウターの原理と進め方 リーダーのためのガイド』誠信書房、2001。

- 8) 金魚ばち方式：円陣を作って座った第1班を取り巻いて第2班が座り、マンツーマンで観察者を決める。何らかのテーマにそって行う討議中の各メンバーを聴き方、話し方、話の内容、視線、ジェスチャーなど言語的・非言語的両面から観察し、後に感じたことを指摘する。他者の目を通して初めて気づく自分に思いたる。

お願いのロールプレイ：2人1組となり、簡単な場面設定をして一方が他方に何かを頼み、他方は数回断った上で最後に了承するという一種の自己主張訓練。

自分と似ている人・対照的な人を探す：グループの中で似ている人（似ている部分）と、逆に対照的な人（対照的な部分）を表現することによって自分について抱いている印象を自己開示する練習。

失敗談（みじめな経験）を話す：これも自己開示の練習のひとつ。話す側は自分の過去を受け入れる、また聞く側は他者への尊敬の念を感じ、自らの劣等感が減少する。

モザイク構成式エクササイズ：数人のグループで日本語を使わず、非言語メッセージないしは外国語のみを使ってつたての向こうにあるモザイク、折り紙などの作品を、数に限定のある見学券を利用の上1人ずつ観察して全く同じものを共同で作り上げる。自分の性格や行動への自己理解を助ける。

- 9) 野矢茂樹『論理トレーニング』産業図書、1997、pp141～154及び、野矢茂樹『論理トレーニング101題』産業図書、2001、野口悠紀雄『「超」勉強法』講談社、1995、pp97～129を利用した。

- 10) まず、各自にとっての「当たり前」をクリアするため恋愛にまつわる様々なトピックにおける自分の位置づけを確認しあった。それを踏まえて、そうした主観を備えた立場から見る他者との「関係」に思いをはせ、そういう関係の輻輳で成り立つグループ全体の「当たり前」を覚知しようとした。「立ち位置」の表明はリアクションで教員にも同様に必要とされた。
- 11) デイヴィッド・シルヴァーマンによる次の記述に留意した。  
(会話分析をどのように行うか) ①常に、関連する発話のシークエンスを明らかにする。②話し手が、特定の役割やアイデンティティーを、自分たちの発話をとおしてどのように獲得するのかを検証する。③発話における特定の成果（たとえば解明の要求、修復、笑い）と、それをとおして特定の成果がつくり出された話の道筋を逆にたどること。  
デイヴィッド・シルヴァーマン著「発話とテキストを分析する」『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房、2006、p224。
- 12) ガーゲン前掲書、p51～p92。4つのテーゼとは次のとおり。①私達が世界や自己を理解するために用いる言葉は、「事実」によって規定されない。②記述や説明、そしてあらゆる表現の形式は、人々の関係から意味を与えられる。③私たちは、何かを説明したり、あるいは別の方法で表現したりする時、同時に、自分達の未来をも創造している。④自分達の理解のあり方について反省することが、明るい未来にとって不可欠である。
- 13) ガーゲン前掲書、p173～p210。
- 14) 穂村弘はエッセイの中で、生涯にわたるパートナーを探す時期や場合限定されない「恋愛」というものの存在の面白さがコミカルに描かれている。例えば「苺狩り」には、長じるに従って「タイプ分類」や「未来予測」の感覚が発達して、目の前の恋愛に対する集中力は失われ、喜びが半減するとし、愉快な代替案を提案している。「そこで私はこのような弱点を逆手にとる新たな恋愛の形式を考えてみた。この人ならと思う相手をみつけて「タイプ分類」や「未来予測」をフルに生かしたバーチャルな心の恋愛を仕掛けるのである。この場合のポイントは二点。相手もまた自分同様に高度な「未来予測」力をもっていること。それから現実の恋愛行動を起こさないこと。白土三平の忍者漫画によれば、剣の達人同士はすれ違っただけで、「ム、できる」とわかるものらしい。(中略) あれの恋愛版だ。」穂村弘著「苺狩り」『もしもし運命の人ですか』メディアファクトリー、2007、p18～p23。
- 15) ガーゲン前掲書、p211～p246。
- 16) マイケル・ホワイト、デビッド・エプストン著、小森康永訳『物語としての家族』金剛出版、1992。
- 17) ジェイムズ・ホルスタイン、ジェイバー・グブリアム著、山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー』相互行為としての社会調査、せりか書房、2004。
- 18) ガーゲン前掲書、p227。